

## 「大龍」について ②

おやさと研究所教授  
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

大和盆地の東側に「大和青垣国定公園」がある。この国定公園は、昭和45年12月28日、盆地に面した東部丘陵域を保護・整備することを目的に、自然公園法にもとづいて指定された。環境庁が総理府の外局として設置される前年のことである。この頃は、日本全体が環境問題に高い関心をもっていた時期で、指定された同年同月の「公害国会」では、公害関係14法案のすべてが可決・成立したことから、窺い知ることができる。

そのような自然環境の保護・保全の高まりの中で指定された当該「国定公園」は、自然的景観と歴史・文化的景観がうまく調和した、いわゆる「風土的景観」が高く評価されたことが指定の大きな理由であると考えられている。

この青垣の山々を有する「国定公園」の麓には、古の人々が利用していた日本最古の道・「山の辺の道」が南北に走っている。毎年、春のゴールデンウィークには特にたくさんのハイカーや旅行者が訪れる。この「道」に沿って、古墳や天皇陵、史跡などのほか、日本最古の形態を残す古社や縁ある名刹など、数多くの歴史・文化遺産が周辺域に残されている。倭建命が望郷の思いで歌ったとされる「大和は国のまほろば 畳なづく青垣山籠れる 大和しうるわし」の歌にあるように、古より、この青垣の山々は、「畳なづく青垣 山籠れる」と形容されるほど、美しいところなのである。

## “龍”が籠る竹林

この青垣の山々を遠くから眺めると、いくつもの竹林が山地の所々に分布しているのがわかる。一旦強い風が吹けば、それぞれの竹林は大きく揺れ動いて波打ち、幾重にもたなびくのを見かけることがある(写真)。そのような、まるで「龍が竹林の中を見え隠れしながら動き回っている姿」のようである。このことから、「籠る」という漢字は、竹かんむりに龍の字が充てられたのではないかと考えている。



風に揺れる「山の辺の道」沿いの竹林。

いずれにおいても、竹は陽の光が射す場所、すなわち林縁部を好んで繁殖・生長する植物である。しかも、竹は、地中から水がにじみ出てくるような、あるいは地下水が地表近くを流れるような、比較的湿潤な土壌環境を好む傾向がある。それゆえ、竹林は、防災関係者の間では、「地表含水状況」を示す「指標植生」として知られている。それは、活断層周辺の地下岩盤が深いところまで破碎されていることから、地下伏流水が地表近くにまで流れやすくなり、その環境が、活断層周辺の土壌を比較的湿潤にさせるのである。まさにそのようなところは、筍の伸びが早く、竹林が拡大しやすい場所なのである。

それゆえ、活断層かどうかの判断材料の一つに、竹林の有無

が採り入れられているのも頷ける。もちろん、竹林が必ずしも活断層の場所というわけではなく、また活断層周辺には必ず竹林があるということでもない。

ただ、大和盆地の東山中には「奈良盆地(東縁)断層帯」が南北に走っており、近い将来、その周辺域を震源とする大きな地震が起きると気象庁は想定している。また当該「断層帯」に沿うように竹林が断続しているのも事実である。このことから、そのような因果関係を類推するのも無理なことではない。

もしも、「大和青垣国定公園」の竹林に“龍”が隠れ籠ると想定し、その“龍”が私たちに“牙”をむけるとしたら、どのような事態が起こりうるだろうか。

## 竹林に籠る“龍”は、いつ私たちへ“牙”をむけるか？

前号で紹介したように、昔から天理周辺では、東山中の龍福寺(天理市滝本町)は龍王の「頭」で、盆地東側を蛇行する山々は「胴体」、三輪山に至る部分は「尾」で、途中の龍王山は「背中」だと言い伝えられてきた。まさに、「四神」の一つで、東に鎮座する「青龍」を想起することもできる。まるでこの「青龍」を守護するかのように、春日大社の御神体である御蓋山みかさの麓には、明治の神仏分離令によって取り壊されるまで、「龍王大神」おおかみを祀る「龍王社」が鎮座していた。

春日大社は、2018年7月5日、この「龍王社」を140年ぶりに再建すると発表し、報道各社はこのことを一斉に報じた。この再建は、大社創建1250年を記念しての事業である。もともと神仏習合の神社だったことから、興福寺の僧侶が籠るさんろう所敷地内に鎮座していたが、神仏分離政策で取り壊されたため、江戸時代以前のように本来の場所に戻そうと計画された。

春日大社境内地の「龍王社」は「龍王大神」が祭神であり、各地に鎮座する龍王社も基本的にこれと同じだと考える。水をつかさどることから雨乞い信仰、龍神信仰の対象とされている。龍王山の中腹に鎮座する「田町龍王社」では、以前、湯水期に雨乞い神事が執り行われ、その後降雨があったとされている。「龍王」は「大龍」のことではないかと考える。

既述したように、大和盆地東側の「山の辺の道」沿いには、活断層の一つ「奈良盆地断層帯」が走っている。また、この「道」沿いには竹林も断続的に繋がっていることから、竹林に籠る“龍”は活断層で、私たちにむけられた“牙”は大地震と考えれば、理解しやすいのかもしれない。

ただ、むけられる“牙”がいつなのか、私たちは知る由もないと思うかも知れないが、本当にそうなのだろうか。

「おふでさぎ」に「かみなりもぢしんをふかぜ水つきも これわ月日のぎねんりいふく」(八号58)とある。かみなり(雷)、ぢしん(地震)、をふかぜ(大風、台風)、水つき(水害、洪水)などの自然災害は、月日(親神)の人間に対する残念で腹立たしい思いの現れの結果だと論されている。

言い換えると、私たちにむけられる“牙”は、親神おほしめしの思召にそわない人間の心の遣い方つかに対して、親神が“龍”すなわち「大龍」となって示される自然災害のことで、地震はそのような「心得違い」が甚だしくなったときに起きるのではないと考える。